
貝殻集め

『終わりの花』補遺 試作版

皆月蒼葉

『終わりの花』正誤表

平成二十六年八月十五日発行の『終わりの花』本文において、多数の誤りが見つかりました。通読において大きな不便をお掛けしたことをお詫びするとともに、ここに九月十三日時点で確認できている誤りについて、正誤表の形で列記いたします。万一ここに記した以外に誤りがありましたら、随時Webサイト(<http://b3.jp/>)にて公表いたしますので、その際はどうかご容赦のほどをよろしくお願いいたします。

- | | | |
|------------|------------------------|-------------|
| 9ページ2行目 | 誤..朝潮 | 正..朝潮 |
| 13ページ17行目 | 誤..要項 | 正..要港 |
| 14ページ13行目 | 誤..朝潮 | 正..朝潮 |
| 23ページ10行目 | 誤..軽く | 正..軽い |
| 24ページ8行目 | 誤..呉 | 正..呉(ルビ追加) |
| 28ページ7行目 | 誤..神湊 | 正..神湊(ルビ追加) |
| 33ページ3行目 | 誤..生ビール | 正..赤ビール |
| 52ページ9行目 | 誤..呉 <small>くわ</small> | 正..呉(ルビ削除) |
| 55ページ14行目 | 誤..さつき | 正..殺気 |
| 82ページ7行目 | 誤..つ気ながら | 正..つきながら |
| 119ページ11行目 | 誤..夕張 | 正..まるゆ |
| 120ページ5行目 | 誤..夕張や | 正..(削除) |
| 125ページ4行目 | 誤..不味い | 正..まずい |
| 155ページ15行目 | 誤..深海棲艦の | 正..(削除) |

- 156 ページ 13 行目
誤… 一体
正… 一帯
- 157 ページ 2 行目
誤… 不知火
正… 夕張
- 171 ページ 8 行目
誤… 沼坂
正… 夕張
- 172 ページ 16 行目
誤… 鈴谷へ向き直った
正… 摩耶へ向き直った
- 193 ページ 11 行目
誤… 吹雪
正… 吹雪
- 205 ページ 17 行目
誤… と呼ばれた駆逐艦
正… (削除)
- 221 ページ 11 行目
誤… 六人
正… 四隻
- 232 ページ 9 行目
誤… 方向
正… 咆吼
- 255 ページ 9 行目
誤… 沼坂は軽く
正… 樺森は軽く
- 255 ページ 17 行目
誤… 技術本部
正… 技術研究所
- 266 ページ 9 行目
誤… 讀賣
正… 國民
- 266 ページ 9 行目
誤… 東京朝日
正… 東京朝日
- 268 ページ 14 行目
誤… 横須賀
正… 横須賀
- 270 ページ 記事 中
誤… 十三日午後三時
正… 十五日午後三時
- 270 ページ 記事 注釈
誤… 九月十四日 讀賣新聞
正… 九月十六日 時事新報

『終わりの花』便覧

『終わりの花』には多数の實在有名詞が歴史的エッセンスとして登場します。いずれもその詳細についての知識がなくとも通読に問題は生じないように製作してはいますが、ここに主だった名詞について解説文を掲載いたします。願わくば作中世界への理解をより深める一助となりますよう。

注意・『終わりの花』の作中世界は改変歴史の上に成り立っています。ここに掲載した解説は現実世界のものであり、作中の立ち位置とは微妙に異なることもあります。その旨ご了承ください。

アンチック体 あんちくたい もとは肉太な千社文字系統の仮名文字書体を指したが、太めの明朝体仮名と見た目が似ていたことから、やがて太明朝の仮名とゴシック体の漢字の混植を指すようになった。

海軍技術研究所 かいぐんぎじゆけんじゆ 一九二三年から一九四五年まで存在した、海軍省隷下の研究機関。時期によって変化はあるが、概ねレーダーや音響兵器等の研究を行う電気・電波部門、暗視装置や化学兵器等の研究を行う理学・化学部門、造船部門、材料部門に分かれていた。

海軍省 かいぐん 一八七二年から一九四五年まで存在した軍政機関。建物の外観から単に「赤煉瓦」とも称される。海軍大臣を長とし、海軍の人事管理や会計業務、基地管理や軍法の執行などを業務とする。作戦の立案や用兵の運用は軍

令部が担当した。

海軍省軍務局 かいぐんぐんむきょく 海軍省内に設置された部局。編成や軍紀維持、艦船の整備や国防思想の普及などを担当し、軍政の実働部隊として活動した。

海軍兵学校 かいぐんへいがく 一八七六年から一九四五年まで存在した日本海軍の士官養成機関。その所在地から単に「江田島」とも称される。当時、旧制中学卒業後の進路としては、ナンバースクールへ進学して帝国大学を目指すよりも、海軍兵学校に入学する方が難関と言われ、各府県の第一中学が合格者数でしのぎを削っていた。

改造文庫 かいざうぶんこ 一九二九年から一九四四年まで改造社が展開していた文庫レーベル。岩波文庫に対抗し、社会科学と文学の二ジャンルからなる。版元の改造社は総合

雑誌『改造』や一冊一円の文学全集シリーズ、いわゆる円本で知られたが、社会主義に関わる書物を多く出版していたことから軍部の圧力を受け、一九四四年に解散の憂き目をみた。

カスロン・セリフ体 リカスロンセ イギリスのウイリアム・カスロンが

七三四年に制作した英字書体。アメリカの独立宣言書や合衆国憲法の初版に使用されている。ギヤラモンと並びオールドスタイル・ローマンの代表作として知られる。

カプトビール びかぶと 一八九八年よ

から一九四三年まで愛知県丸三麦酒が販売していたビール。本格ドイツビールの完全再現を目指し、ドイツ製の醸造機を用い、ドイツ人技師を招いて生産された。東海地方では最大のシェアを誇り、北海道のサッポロ、東京のエビス、

横浜のキリン、大阪のアサヒの四大ビールに対抗する新機軸となった。販売元の丸三麦酒は根津財閥への譲渡、帝国鉦泉や大日本麦酒との合併など紆余曲折を経て、一九四三年、企業整備令により製造工場が閉鎖され、販売は終了した。

川崎重工業 かわさきじゅうぎょう 一八九六年

設立の川崎造船所を前身とする重工業企業。一九一五年には霧島と並び民間造船所初の戦艦となる榛名を建造。一九二七年の金融恐慌により、メインバンクである十五銀行が臨時休業したことで経営危機に陥るが、川崎造船所の破産により建艦体制が維持できなくなることを危惧した海軍の緊急発注により重巡洋艦・摩耶を建造。しかし一九二九年の世界恐慌で経営状況はさらに悪化、一九三一年には破産状態となり強制和議を申請す

る。その後、満州事変を境に景気が上向いたことで、再建への目処が立った。一九三九年に川崎重工業へ社名変更。一九三七年に分社化した川崎航空機工業は陸軍の専属メーカーとして、戦闘機や爆撃機を生産していた。

生糸検査所 なまじょう 輸出生糸の検査を行うために神戸市の新港地区

に設置された施設。一九一〇年代まで生糸輸出は横浜港がその役割を一手に担っていたが、一九二三年の関東大震災によつて機能不全に陥った。その間隙を突いて神戸港を生糸輸出の新たな拠点とすべく、神戸市が一九二七年に私立検査所を設立する。折しも一九二六年に輸出生糸の計量法が変更され、市立検査所は新しい計量法に当初から対応していたこともあり盛況を極め、それまでの横浜一港主義

から二港主義への転換を実現させた。一九三二年には国立化。

企画院 くわんくわん 一九三七年から一九四三年まで存在した、内閣総理大臣直属の政府機関。重要政策の立案組織として、企画庁と内閣資源局が統合して発足した。当時の中央省庁においては、産業ごとのカルテル・トラストの結成を奨励する一九三一年の重要産業統制法を皮切りに、マルクス主義に影響を受けた革新官僚が発言力を増していた。企画院は彼ら革新官僚の牙城として、ソ連の計画経済をモデルとした戦時統制経済政策を立案する機関として権限を強めていく。その集大成といえるのが一九三八年の国家総動員法である。しかし、同法と同じく一九三八年の電力国家管理法など、社会主義的な統制政策を強権的に推し進める姿勢は

財界の反発を招き、一九三九年から一九四一年にかけ、企画院内でマルクス主義の勉強会に参加していた革新官僚らが左翼活動の嫌疑により一斉検挙される企画院事件に繋がった。

軍令部 いんれいぶ 一九九三年から一九四五年まで存在した海軍の軍令機関。作戦の立案や用兵の運用を主な業務とする。陸軍における参謀本部と同様の位置づけである。

光学サンセリフ くわくせりふ 通常の書体は人間が視認することを前提として設計されるが、ごく限られた書体は機械による光学読取に最適化されたデザインを持つ。例えばバーコードの下部に配される書体「OCR・B」がそれであり、その独特の形態は人間の目からすればやや奇異にも映る。

ゴールデンバット ごうとんばつと 一九〇

六年から販売されている紙巻タバコの銘柄。「バット」の愛称で親しまれる。等級の低い葉を用いていたため最も低位の三級品に位置づけられていたが、熱烈な愛好者も多く、なかでも作家や文学ファンに人気があつた。

国民新聞 こくみん 一九九〇年に徳富蘇峰によつて創刊された日刊新聞。当初は自由主義、平等主義を基調とする論陣を張っていたが、一八九五年の三国干渉を契機に国家主義的な論調に変化、政府系新聞の代表格として認識されるようになる。特に一九一三年の第一次護憲運動では、桂内閣を擁護する論陣を張つたことで護憲派の襲撃に遭っている。一九二三年の関東大震災で業績は著しく悪化、それまで東京五大紙の一角であつたのが、五大紙未滿の都新聞に並ぶほ

どにまで部数は落ち込んだ。一九二六年に根津財閥が資本参加するが経営は好転せず、一九三三年に名古屋の新愛知新聞に買収され、傘下でようやく経営再建にこぎ着ける。一九四二年に新聞統制により都新聞と合併、東京新聞に改題。**時事新報** じじしんぱう 一八八二年に福澤諭吉が創刊、一九三六年まで存在した日刊新聞。東京五大紙の一角。「不偏不党」の旗印どおり特定の政党に与する立場をとらず、中立的立場から国権の興張を求める姿勢や、平明な文体などが知識層の支持を受け、大正時代には高級紙の代表格と目され、「日本一の時事新報」の呼び声も高かった。しかし一九二三年の関東大震災で業績は急激に悪化、大阪地盤の朝日新聞や日日新聞に押され、一九三六年には東京日日新聞に統合された。

精工舎 せいこうしゃ 一八八二年に東京・銀座の輸入時計販売店、服部時計店の製造部門として設立された精密機器メーカー。海軍航空時計の製造を行っていたことでも知られる。当初海軍はスイスのロンジン社製の航空時計を支給していたが、輸入に際してアメリカのウィットナー社を介しており、対米関係の悪化に伴い一九四一年、国産製品に切り替える目的で精工舎製の時計が採用された。戦後、一九九七年にセイコーへ社名変更。

専売局 せんばいきょく 一九〇七年から一九四九年まで存在した大蔵省の外局。食塩やタバコ、樟腦の専売業務を担当した。一九三七年にはアルコール、一九四三年には石油も専売品目に追加された。

チェーホフ ちほふ アントン・チェーホフ。ロシアの劇作家、短編小説家。

説家。一八六〇年生、一九〇四年没。代表作に「かもめ」「桜の園」。

築地ゴチック つきぢごちっく 金属活字時代の和文書体には、大きく分けて「築地体」と「秀英体」の二つの流れが存在した。東京築地活版製造所で製作された築地体は一面一画がはっきりとし、また字面も正方に近い明瞭さが特徴となっている。一方で秀英舎の鑄造した秀英体は筆致に脈絡が多く残り、字面も正方にこだわらない流麗さを持つ。この二書体は後の多くの書体に影響を与えた。

伝染病予防法 でんせんびょうびやうぼう 防疫と医療の普及を目的として一九九七年に成立した法律。一九九八年の感染症法成立に伴い一九九九年に廃止された。第一条一項に「伝染病患者ノ死体ハ市町村長又ハ予防委員ニ於テ充分ト認ムル消毒方法

ヲ施シタル後ニ非サレハ埋葬スヘカラス」、二項に「伝染病患者ノ死体ハ医師ノ検案ニ依リ市町村長、検査委員又ハ予防委員ノ認可ヲ經テ24時間内ニ埋葬スルコトヲ得」、第一二条に「伝染病患者ノ死体ハ火葬スヘシ」の文言がある。

東京朝日新聞 とうきょうあさひしんぶん 一八八八年に大阪の朝日新聞が東京のめざまし新聞を買収し、朝日新聞の東日本版として新創刊した日刊新聞。

東京五大紙の一画。一九二三年の関東大震災では在京紙が軒並み大きく業績を落とす中、東京日日新聞とともに大阪地盤の利点を生かして素早い立ち直りを見せ、部数を大きく伸張させた。大正期には普選・軍縮賛成、シベリア出兵反対など反軍リベラルの論調で人氣を博すが、一九三一年の満州事変以降は東京日日新聞に続く形で対

外強硬論に転換。一九四〇年に大阪朝日新聞と統合し、朝日新聞に改題。

東京通信工業 とうきょうつうしんこうぎょう 一九四六年に設立された電機メーカー。日本初のテープレコーダーやトランジスタラジオを製造販売し、後発メーカーながら技術力の高さを武器に戦前からの大手メーカーと渡り合う。一九五八年に社名をソニーに変更。

東京帝国大学 とうきょうていこくだいがく 一八七七年に設立された日本初の近代大学。当初は東京大学と称したが、一八八六年の帝国大学令により帝国大学と改称、一八九七年の京都帝国大学の設置に伴い東京帝国大学と改称した。

東京日日新聞 とうきょうにちじつしんぶん 一八七二年に創刊された東京最初の日刊新聞。当初は主筆の福地源一郎のも

とで親政府の論陣を張り、未広鉄腸率いる朝野新聞など民権派の政論新聞に対抗した。しかし御用新聞との評価が定着して経営不振に陥り、一九一一年に大阪毎日新聞により買収。自由主義的な論陣への転換で部数を伸ばして東京五大紙の一角に数えられるようになり、同様の論調をとる東京朝日新聞と激しい競争を繰り広げた。しかし一九三一年の満州事変では親会社の大阪毎日新聞とともにいち早く陸軍支持の方針をとり、「毎日新聞後援、関東軍主催、満州事変」とも揶揄された。一九四三年に新聞統制により大阪毎日新聞と統合、毎日新聞に改題。

府立一中 ふりつちゅう 東京府立第一中学校の略称。旧制中学校制度の下、一九〇一年から一九四三年まで存在した。進学校の代表格と目され、

第一高等学校への進学者数は全国最多であった。一九四三年の都制施行により東京都立第一中学校に改称、戦後の学制改革により一九五〇年には東京都立日比谷高等学校へと改称。

七六艦隊 かんなろく 脱走兵等の軍紀違反者により編成される懲罰部隊はナチス・ドイツやソビエト連邦において存在したほか、日本にも似た性格の陸軍教化隊が存在した。前身となる陸軍懲治隊は懲罰色の濃いものだったが、一九二三年に設立された教化隊はその名の通り軍紀違反者の教化に目的が移っている。部隊は姫路に置かれ、中部七六部隊の通称を与えられて一九四五年まで存続した。

日本光学工業 かにくわうがく 光学兵器の国産化を目的として一九一七年に設立された光学機器メーカー。

海軍系企業として多くの鑑定用光学兵器を開発納入し、陸軍への納品実績の多い東京光学機械とともに「陸のトーコー、海のニッコー」と称された。戦後はカメラを中心とした民生メーカーに転換。

一九八八年、社名をニコンに変更。**ピース** ピース 一九四六年から販売されている紙巻タバコの銘柄。バージニア葉にバナラの香りを加え、香味が強いのが特徴。発売当初は通常銘柄の十倍以上の価格が設定され、高級タバコとして知られた。

富士通信機製造 ふじつうしん 一九三五年に富士電機製造の通信機部門を分離する形で設立された電機メーカー。母体となった富士電機製造は古河電気工業とドイツのシーメンス社との合弁企業で、社名は両者の頭文字に由来する。一九六七年に社名を富士通に変更。

報知新聞 ほうちしん 一八九四年に前島密らによって創刊された郵便報知新聞を前身とする日刊新聞。一八九四年創刊。東京五大紙の一角に数えられ、大正前期において最も部数の多かった新聞であるが、一九二三年の関東大震災で部数を減らす。一九三〇年には講談社に買収されて経営を立て直そうとするが、不振のまま一九四一年には講談社が撤退。一九四二年に新聞統制により読売新聞に合併された。

安田銀行 やすだぎん 一八八〇年に創業した銀行。安田財閥の中核として大規模公共事業に積極的に投資し、政府との関係を深めていく。その後、北清事変に端を発する一九〇一年の恐慌、第一次世界大戦後の輸出不振による一九二〇年の戦後恐慌、一九二三年九月の関東大震災などで中小の銀行が相次い

で経営危機に陥る中、安田銀行はそれらを援助し、一九二三年十一月には十行との大合同を行う。以後、五〇年近くにわたり国内最大の銀行として君臨し続けた。一九四八年には財閥解体とともに富士銀行と改称。二〇〇〇年代に入り、

第一勧業銀行、日本興業銀行との再編に入り、二〇〇二年に大企業向けのみずほコーポレート銀行、個人・中小企業向けのみずほ銀行が成立。二〇一三年には両行は合併し、みずほ銀行に改称。

ラッキーストライク らっきすたいく 一八七一年から販売されているアメリカのタバコ銘柄。当初はパイプタバコの銘柄であり、紙巻タバコとしては一九一六年から販売されている。パッケージに描かれたブルズアイと呼ばれる意匠から古くは「赤玉」の愛称で親しまれた。ア

メリカ軍の軍用物資に指定されていて、その名称から通常の兵士には「敵弾に当たる」として縁起の悪さから敬遠されたが、反面で戦闘機パイロットからは縁起物として人気があったとされる。

立憲政友会 りつけんせいゆうかい 一九〇〇年から一九四〇年まで存在した政党。政府が議会を軽視して独自に行動する超然主義が破綻し、政党政治の必要性を感じた伊藤博文によって組織された。明治後期から大正

期にかけては第一党となることが多く、一九一八年には初の本格的な政党内閣となる原敬内閣を成立させている。一九二七年に憲政会と政友本党が合併して立憲民政党ができる。議会は立憲政友会と立憲民政党の二大政党制へと移行し、両政党間で激しく争った。議会中心主義、社会政策重視を唱え

る立憲民政党に対し、立憲政友会は比較的保守的であり、皇室中心主義を唱え、親軍的な態度をとることが多かった。そのため立憲政友会や、第三極の革新政党である社会大衆党に対して苦戦を強いられることもしばしばだった。一九

三七年からの日中戦争等で戦時色が濃くなる中、一九四〇年に大政翼賛会が発足するとこれに参加するために立憲民政党、社会大衆党などととも解散。

リボンシトロン りぼんしとろん 一九〇九年から販売されているレモン風味の炭酸飲料。大日本麦酒により当初はシトロンという名称で販売されていたが、一九一五年にリボンシトロンに改称。三ツ矢サイダーとともに戦前の代表的な清涼飲料水であった。

断章

六月二十七日

注意…『終わりの花』本編を通読した上で読むことをお勧めします。

「今、どの辺り？」

低音が響く機内で、少女の潜めた声がわずかに聞こえる。暗がりの中でかちり、かちりと機械の音がかすかに響き、ぼんやりとした光が浮かび上がった。

「うん、そろそろ頃合いっぼいね」

光——機械手帳から引き出された天然色フィルムを見ながら、長髪の少女が微笑んだ。フィルムから放たれる淡い光は、少女の碧髪をきらめかせる。

フィルムは穏やかな水色で満たされ、わずかに黄色が点々として乗っている。賀茂諸島。皇都の南、太平洋上に南北に連なる島嶼群の地図だ。地図の中心にはくさび形の印が赤く穿たれ、現在地がそこであることを示している。より正確を期して言えば、現在地はその5000メートル上空。

横須賀で計算してもらった限りでは、理屈の上では可能はずだ。それでも、考えれば考えるほど不安は増す。自分たちがやろうとしていること、艤装の浮力のみに頼って、高度500

0メートルの暗闇から落下すること。怖くないという方がどうかしている。凍えたように両腕を組み、右腕の衣をぎゅっと掴んだ。輸送機のエンジン音が重々しく響く。

「鈴谷」

声をかけられ、顔を上げる。機械手帳を手にした少女が、のぞき込むように見つめていた。後ろに束ねた栗色の髪がかすかに揺れている。

「……鈴谷、大丈夫ですか？」

不安げな表情で尋ねる彼女——熊野の声もまた、わずかに震えているようだった。その様子を見て、鈴谷は急におかしさがこみ上げてくるのを感じ、くすりと笑んだ。怪訝そうに首をか上げる熊野を見ながら、

「えいっ」

楽しそうに歯を見せ、熊野にがばりと飛びつく。

「ひあっ!？」

熊野が小さく声を上げるが、鈴谷は構わず両の腕を熊野の背にまわし、右肩に顎を置いた。

「生意気だなあ、自分よりもあたしの心配なんかしちゃって!」

言いながら頭を首筋にぴたりとくっつけて、焦る熊野に笑いかける。

「ちょ、いきなりなんですの!」

「えー、だってこうした方が落ち着くでしょ」

暢気に笑つてみせながら、熊野の震える肩をぎゅつと抱き寄せた。心臓の音が聞こえる。うるさいほどに響く鼓動に、そうでもないか、と鈴谷はひとりばつが悪そうに目を伏せた。

熊野は体じゅうを強ばらせながら、うう、と恥ずかしげにうめき声を上げている。その様子に、鈴谷は小さく、ため息にも似た長い息をつく。

「……怖くないの？」

熊野の肩に顔をうずめたまま、鈴谷が尋ねた。熊野はわずかに首を動かし、鈴谷の頭に目をやった。鈴谷は怯えきつたように、小刻みに首を横に振っていた。

「あたしはさ、怖い。すつごく怖い」

これからやろうとしていることへの恐怖。失敗すれば、おそらくは——。胸が押しつけられたように痛む。震える声で鈴谷は続けた。

「熊野は怖くないの？」

熊野は答えず、ただ首を小さく横に振った。鈴谷は目を閉じ、ゆつくりと息を吐く。

「だったらさ、こうしての方が、安心できるじゃん」

鈴谷が言うのと、熊野はゆつくりと肩の力を抜いて、背中へと腕を回した。暗闇の中、フィルムの弱々しい光だけが二人をかたどる。それを見る者はいない。

「ねえ熊野」

「……なんですか？」

二人の穏やかな声が、エンジンの轟音にかき消されそうになりながらもかすかに聞こえる。

「……落ち着くね」

「そうですね」

抱き合いながら、互いの心音を確かめるように耳を傾ける。

「ねえ熊野」

「なんですの？」

「向こうに着いたらさ、沼っちきつと驚くよね」

熊野はくすりと笑い声を漏らす。

「ねえ熊野」

熊野は声を出さず、優しく背を撫でて応え、鈴谷の声を待つ。

「落ちる時もさ、こうやって落ちよっか」

熊野を抱きしめる腕に、かすかに力がこもった。

熊野は何も言わず、ゆっくりと頷く。二人の吐息の音が続いた。

輸送機は小さく揺れ、二人の体は左右に振れる。鈴谷は熊野の服をぎゅつと掴み、衣の擦れる音がかすかに響いた。熊野もまた鈴谷を強く抱き返す。

「……ねえ熊野」

四回目の鈴谷の声は、わずかに震えていた。

「なんですか？」

つとめて優しげな口調で熊野が返すが、鈴谷の声はすぐには聞こえてこない。

とくん、とくんという足早な心音だけが聞こえてくる。熊野は右腕を鈴谷の頭へと伸ばし、碧色の繊細な髪を柔らかく撫でた。

「……あたしたち、大丈夫だよね……？」

ようやく聞こえた鈴谷の言葉に、熊野はひときわ強く鈴谷の体を抱きしめた。

「……大丈夫、大丈夫ですわ」

「……ありがと」

吐息とともに、鈴谷は穏やかな声で応えた。

二人の声は聞こえなくなった。お互いに何も言うことなく、ただただ相手の体を抱きしめている。熊野が頭を撫でると、鈴谷が背をさすって応える。

抱擁は続く。さながら相手の存在を確かめ、そのことで自分の存在を了解しているかのよう
に、二人は互いの体を強く抱きしめる。

エンジン音はもはや聞こえない。二人の鼓動だけがうるさく響く。沈黙は十秒ともに十秒とも続いた。やがて、

「ねえ熊野」

鈴谷は顔を上げ、熊野の顔を真正面に見つめる。潤んだ瞳、わずかに紅の差した頬、薄い唇。

鈴谷はひどくゆっくりと上体を前に倒し――

機械手帳は省電力モードに入り、フィルムの光は消えた。二人の周囲を暗闇が支配する。心臓の音さえ、彼女たちの耳には届かなかった。

貝殻集め

みなづきあおば
皆月蒼葉

発行

平成二十六年九月十四日 発行

著者

皆月蒼葉

発行者

びびび文庫

<http://bi3.jp/>

mail@bi3.jp

Twitter: @m_soba, @h_soba

印刷

株式会社ハン六

装丁者

皆月蒼葉

本書の全部または一部を、著作権法で認められている範囲を超えて複製、転載、インターネットへのアップロードを行うことを固く禁じます。
